

トビ *Milvus migrans* (鳶)



(撮影：戸谷)



識別のポイント

- ・飛んでいるときは尾羽根の先がM字型に切れ込んでいる。
- ・カラスより二回りほど大きい。

大 き さ：カラスより大きい

生息環境：低地～山地

繁殖場所：森林内の樹上

餌：動物の死体、鳥、小動物など

鳴き声：「ピーヒョロロ…」など

天竜川における生息時期

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月

繁殖期

渡り区分：留鳥

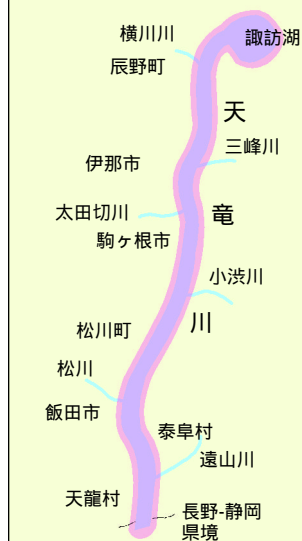
一般習性・分布

- ・留鳥として市街地、海岸、河川、湖沼、山地など、様々な場所に数多く生息する。日本のタカの仲間の中で最も一般的な種。
- ・低地から山地の大きな木の上に枝を使って皿形の巣を作る。
- ・上昇気流に乗って高空をたくさんのトビが旋回していることがある。普段はあまり高くない上空をふらふらと飛びながら餌を探していることが多い。
- ・海岸や河原、養魚場の周辺など、動物の死体が漂着するような場所には集団でいることがある。

天竜川上流における生息状況

天竜川上流全域に、ごく普通に見られる。伊那市では、寄洲のヤナギの樹上約5mに営巣したことがある。また、天竜峡付近にはねぐらがあり、秋には100羽以上が集合していた。

天竜川上流における分布



オオタカ *Accipiter gentilis* (大鷹・蒼鷹)



識別のポイント ・カラスくらいの大きさで、飛んでいるときは翼が幅広く、尾が長く見える。

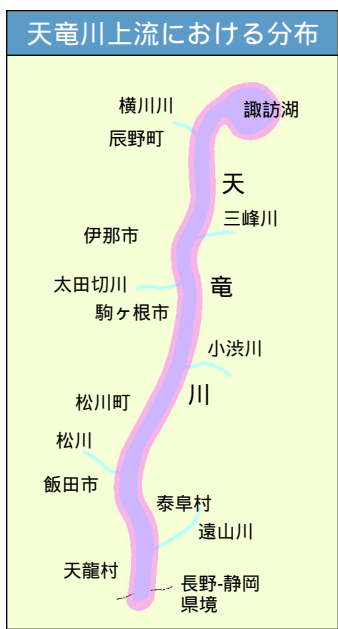
<p>大 き さ：カラスと同じくらい</p> <p>生息環境：低地～山地の森林とその周辺</p> <p>繁殖場所：森林内の樹上</p> <p>餌：鳥など</p> <p>鳴き声：「キッキッキ」など</p>	<p>天竜川における生息時期</p> <table border="1"> <tr> <td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td> </tr> <tr> <td colspan="5" style="background-color: #e0f0ff;"></td> <td colspan="2" style="background-color: #0070c0;"></td> <td colspan="5" style="background-color: #e0f0ff;"></td> </tr> <tr> <td colspan="7" style="text-align: center;">繁殖期</td> <td colspan="5"></td> </tr> </table> <p>渡り区分：留鳥</p>	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12													繁殖期											
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12																										
繁殖期																																					

一般習性・分布

- ・繁殖期には低地から山地の林に生息し、秋冬には河原や農耕地、市街地など開けた場所にも出現する。
- ・高木の樹上に枯れ枝を使って営巣する。人里に近い段丘のアカマツ林に営巣することも多い。
- ・精悍な容姿を持つゆえに、はく製用などを目的とした密猟が後を絶たない。また、食物連鎖において高次の消費者であるため、もともと数が少ない種であるが、里山の開発等によって生息地が消滅した地域が多い。環境庁のレッドデータブックでは危急種に指定されている。

天竜川上流における生息状況

冬場、広い河川敷を持つ区間では比較的頻繁に見られるが、広い範囲を移動していることが多く、一ヶ所にとどまっていることはあまりない。駒ヶ根市付近や宮田村付近では、繁殖期にも見られた。駒ヶ根市では、河岸段丘のアカマツ林に営巣していたことがある。



ノスリ Buteo buteo



親鳥とヒナ

(撮影：戸谷)



識別のポイント

- ・カラスくらいの大きさで、飛んでいるときは翼の下面が白っぽく見える。
- ・全体的にずんぐりして見える。

大きさ：カラスより大きい

生息環境：低地～山地の森林とその周辺

繁殖場所：森林内の樹上

餌：鳥類、哺乳類、両生類、爬虫類など

鳴き声：「ピーヨー」など

天竜川における生息時期

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月



繁殖期

渡り区分：留鳥

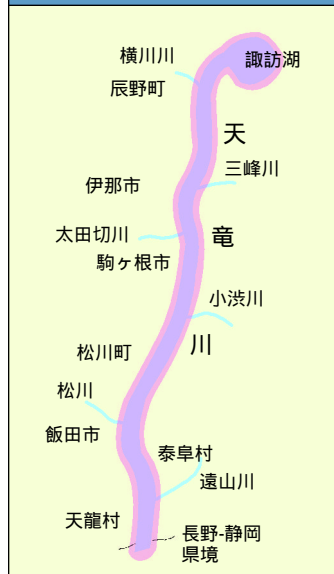
一般習性・分布

- ・留鳥として低地から山地の森林に生息し、付近の草原や河原、耕地など開けた場所で獲物を捕る。比較的個体数が多く、普通に見られるタカである。
- ・森林の大木の又状の枝の上に営巣することが多いが、断崖の岩棚に巣を造ることもある。
- ・飛翔中は翼の下面が白っぽく見え、中央付近にこげ茶色の大きな斑があることで、他のタカと区別できる。

天竜川上流における生息状況

繁殖期は森林に接した区間で、冬は主に広い河川敷を有する区間で普通に見られる。河川敷内のハリエンジュなどにもよくとまる。繁殖状況は不明であるが、松川町付近では繁殖期にも頻繁に観察されており、近くで営巣している可能性もある。

天竜川上流における分布



チョウゲンボウ *Falco tinnunculus* (長元坊)



(撮影：戸谷)

ホバリング(停空飛翔)



識別のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・先端がややとがって見える翼でひらひらと飛ぶ。 ・よくホバリング(停空飛翔)する。
---------	--

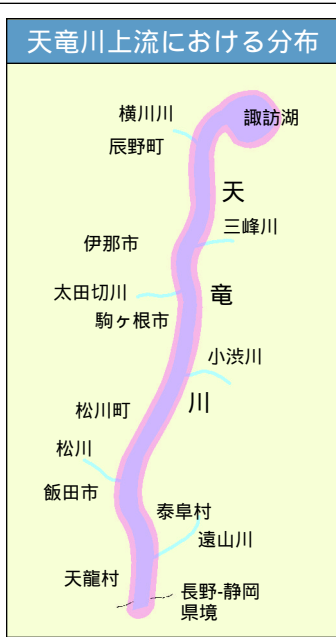
<p>大きさ：ハトと同じくらい</p> <p>生息環境：低地～山地の開けた場所</p> <p>繁殖場所：岩棚、樹洞、建物のすき間</p> <p>餌：鳥類、哺乳類、昆虫類など</p> <p>鳴き声：「キィキィキィキィ…」など</p>	<p>天竜川における生息時期</p> <table border="1"> <tr> <td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td> </tr> <tr> <td colspan="6" style="background-color: #e0f2f1;"></td> <td colspan="2" style="background-color: #4db6ac;"></td> <td colspan="4" style="background-color: #e0f2f1;"></td> </tr> <tr> <td colspan="6"></td> <td colspan="2" style="text-align: center;">繁殖期</td> <td colspan="4"></td> </tr> </table> <p>渡り区分：留鳥</p>	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12																			繁殖期					
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12																										
						繁殖期																															

一般習性・分布

- ・留鳥として農耕地、原野、草原、河原など開けた場所に好んで生息する小型のハヤブサ。
- ・近年は都市部への進出が目立ち、市街地やビル街でも見られることがある。
- ・本来は断崖の岩棚に営巣することが多いが、最近では換気口や鉄橋のすき間など、建物に営巣する例が増えている (P.47参照)。

天竜川上流における生息状況

最も普通に見られる小型のハヤブサで、特に飯田以北では全域にわたって見られる。阿島橋での繁殖例では、橋の鉄骨のすき間に簡単な巣を造っていた。また、排水口や、橋げたと橋の間などでも営巣し、天竜川と、そこに架かる橋との関係が深い鳥である。



コラム 橋や建物に営巣するチョウゲンボウ

チョウゲンボウはハヤブサ科の小型の猛禽類^{もうきんるい}で、生息域が人間の生活空間と重なっていて比較的目にする事の多い鳥です。チョウゲンボウの営巣場所は川の侵食によってできた崖のくぼみやヤマセミの古巣の穴がほとんどですが、1970年代後半に入ると全国各地から橋やビルで営巣する例が報告され始めました。

1980年以前の伊那谷におけるチョウゲンボウの繁殖記録は4例だけです。1942年に下村謙史氏が喬木村九十九谷で、1954年と1957年に原富貴人氏が伊那市と松川町で、宮崎学氏が中田切川の崖で1980年まで繁殖していたのを確認しています。これらの繁殖場所はいずれも崖にできたくぼみやヤマセミの古巣です。

1980年以後しばらくは伊那谷においてチョウゲンボウの繁殖地についての報告はありませんでしたが、1985年頃からチョウゲンボウの繁殖確認が増え始めました。これまでに16ヶ所で繁殖が確認されましたが、箕輪町松島神社の樹洞で営巣した1例以外はすべて橋やビルなどの人工構造物に営巣していました。チョウゲンボウの繁殖地が急速に増えていること、そしてその繁殖地のほとんどが人工構造物であること、この2点は特に注目すべき点です。



岩穴で繁殖するチョウゲンボウ



換気扇ダクトに造られたチョウゲンボウの巣とヒナ

長野県で最初に人工構造物への営巣が確認されたのは、1964年の松本菅野中学校です。これはおそらく、人工構造物への営巣としては全国で最初の記録と思われます。しばらく空白があった後、1979年に松本平や善光寺平の7ヶ所で、そして1985年頃より上伊那、続いて下伊那で人工構造物での繁殖確認が増えてきています。

チョウゲンボウは冬期に繁殖地に留まる個体と南に移動する個体がいまます。積雪の多い地方では多くの個体が南へ移動し、その年巣立った若鳥もほとんどが南へ移動します。移動した個体は2月から3月にかけて前年の繁殖地に戻ったり、新たな繁殖地を見つけ、チョウゲンボウの繁殖分布が拡大していきます。

このようなチョウゲンボウの分布拡大のしかたから考えると、伊那谷でチョウゲンボウの繁殖場所が増えている理由は、松本平や善光寺平で人工構造物という繁殖場所を獲得した個体が冬期に南へ移動し、伊那谷において人工構造物という今まで利用されていなかった場所を新たな繁殖場所として開拓したためと考えられます。

(桐生尊義)